Ⅱ－４　朝日焼

記録者の氏名　岡　大志

日時　　７月９日

場所　〒611-0021 京都府宇治市宇治山田 11 番地

ヒアリングの相手　朝日焼き　松林祐典様

ヒアリング内容

〇ロクロ場見学

・ロクロ場（明治時代のまま）

・手回しのロクロを使用（ごまかしのきかないろくろで繊細なものを作るときに使う）

・京都、瀬戸以外はけりろくろを使用している

・現在は電気ロクロを使用

・大きなもの以外左手一本でだけでろくろを作成

・最初は手回しのロクロを使用し、基本技術をみにつける→できるようになっ

たら電気ロクロを使用
・急激に職人がいなくなったのを肌で感じた。
・芯の棒が木を使っていたがヘリが早いので現在鉄製
・手回しの技術は中国から伝来
・ろくろが現在５つ
・ガス窯は現在４つのうち３つを現在使用
・窯は全部で７つ
〇朝日焼きについて
・太陽ヶ丘で土を掘っている。
・朝日焼きの由来
朝日山の土を使っていたことから朝日焼きと呼ばれるようになった
・ろくろをひく：ろくろでお椀など作ることを指す
・けろくろは最初から一軒のみ
・初心者が修行に入ると・・・・・
下仕事を行う（作ったものを乾燥させる作業、土を落とす作業、工具を作るための作業などがある）
・道具は自分で作り自分で工夫することが大切！！
・登り窯で焼き続けることにこだわりを持っている
・7～8 割は焼き上がりがよくない
・昔は商品として成り立つものが千分の一　→だんだん確率が上がってきたが50％程度の高確率になることはない
・焼き上がりがよくないものを商品化しようとは考えていない
〇登り窯について

・昭和 50 年作成
・窯はコントロールできない
・炊き方：経験や勘に頼ることが多い
・多量の温度計を設置し管理
・しめ縄をかけ　畏敬の念をもち常に謙虚に炎の力を借りているという思いを常に持つ
・かまの使用頻度
　ガス窯　　月１回
　小さい窯　月３回
　登り窯　　年２回　程度
・準備後始末に１カ月程度かかる、年５回程度の使用が限界
・４つの部屋に分かれていて 1350 度
・1 回火を入れた日から合計 3 日かけて管理
・管理整備には 4 人
・空気、薪の量などで温度調整（調整研究室）
・薪は横から入れる
・薪は赤松の木だけ（火力が強く燃え残りが少ない）
〇朝日焼きの値段設定について
・原価＋評価の中で決まる
・きれいなものを高く
・コストと手間を考慮
・生活品と美術品では値段のつけ方が違う
・最近は外国人の来店が増えた（円安になってから）
〇技術の伝承
・伝統工芸全体を通して新しい人若い人を入れているところが少ない
・陶芸の職人になりたいという人は多い
・産業としての受け入れが減っている
・30 人中 5 人程度しか職人として残っていない（独立している人は除く）など危機的環境にある。
自分の子供に仕事を進める職人は少ない
〇売上げ
・全体の半分が茶道具、3 割が日用品、2 割が陶芸教室（茶道具の売り上げのう

ち5%が海外)
〇最後に
伝えるということ仕事としてやっていかなければならない！！ということを教えていただいた。
〇感想
見学するまで焼き物すべてが商品になると考えていたが大きな間違えで7～8割は焼き上がりがよくない。焼き上がりがよくないものを商品化しようとは考えていない。というシビアな環境にあることを知れて良かった。実際に現地に行ってみなければわからないということを再認識できた。
〇入手資料
・なし
〇今後の調査に対して参考になる点、反省する点
参考点
・実際のイメージとは異なるかもしれないが見学する前にイメージを膨らませておくことが大事だと感じた。
反省点
・写真が少なかった
・